

魅せられて 私の「歌」道標

学生時代の二年間



花山多佳子

父が歌人であるために、その影響でごく自然に短歌を始めたように、人からは見えるだろうが、実際はそういうわけでもなかった。小学校四年の頃、父は祖父母のもとに私を残して再婚し（母は幼少の頃にすでに去っていた）、以来、生活を共にしたことはない。私は父を特に歌人として意識してはいなかったし、短歌に興味をもつこともなかった。祖父はマルクス経済学者であったので、家に来るとき父は祖父とそういった話ばかりしていて、やはり同系の叔父二人と相寄ると酒呑みながらのカンカンガクガクの議論になった。そんな中で育った私は、小説や詩にばかりひたっていて全く社会や歴史に関心のないことの方に、コンプレックスを感じていたのである。

京都の大学に入って寮生となり、寮闘争から学生運動へと組み込まれていったのは、寮という場での成り行きでもあったが、このコンプレックスが少なからず影響していたように思う。生活は劇的に変わった。一人っ子が一人で本を読むこともなくなって、明けても暮れてものべつに友達が共に居た。連日の会議と動員。それが二年間近くになって、遂に限界が来て、寮を出て下宿。学生運動とも一切関わりを絶ってしまった。

下宿で一人になって虚脱状態ときびしさで、ふと短歌をつくってみようかと思った。その頃よく手紙をくれる変な男子学生がいて、そのつどすごい達筆で吉井勇のうたが書きそえられていた。手紙自体はともかく、

ゆる知らず涙ながれぬ閉されし歌舞練場
のまへを過れば

などは、歩いていると浮かんできて泣けた。今から思うと、これが直接のきっかけだったのかもしれない。そのあと、かつてわずかに読んだことのある啄木や、白秋の『桐の花』がしきりになつかしく思われてきたのだから。マイナーな状態が短歌に結びつくというわりと典型的なケースだったのだろうと思う。

つくり始めてすぐ、「短歌年鑑」で近くの結社をさがして、「塔」発行所である高安国世宅を訪れるという意外な行動力を発揮したのも、寂しかったからである。高安国世は「塔」の前にまず「京大短歌会」への出席をすすめ、そこで同学年の永田和宏に出会った。「京大短歌会」で出されるうたは、てんでんばらばらで、詩の片

言、モザイク風が多く、近代短歌のイメージしかない私は、ずいぶん混乱したものである。初めて載せた会報「No.3」から抽いてみると、

大声の三賢者と私の視線が平行である。

終に羊皮紙の縁が焦げる

杉山幸治

緑青のいみじき光 真昼時 ぼくたち碧

空泳ぐ角砂糖の群れ

菊沢友義

嘔吐するきさしも熱ある季なればことば

はづきの天めがけ射る

日野大順

あの胸が岬のように遠かった。畜生！

いつまでおれの少年

永田和宏

栗鼠の瞳の黒くみひらくその瞳にて雨上

がりの空見ていたきかな

玉城多佳子（筆者）

私ののは全く幼い近代短歌調だが、並べてみると皆それなりに幼かったようだ。高安国世は毎回出席していたが、アララギ調のうたはほとんどなく、好きにやらせていて、特に指導するということがなかった。

永田和宏にさそわれて同人誌「幻想派」の集まりに顔を出したのには、メンバーの河野裕子が角川短歌賞を受賞した折の批評会であった。河野とはそれが初対面で、彼女は頭の上に「短歌」をのっけていて、上を向いたまま、発言をきいてはきやらさやらと笑うので、かなり驚いた。

河野裕子とはたまにそのへんを二人で歩き回った。何をしゃべっ

たかおほえていないが短歌の話はしなかったように思う。或る日は鞍馬の近くの八瀬遊園に行ったが、平日で雨上がりだったので、入園者は私達だけであった。ベンチで黙って坐っている私達のために、園がアシカショーをやってくれた。河野は園に行ったことはよくおぼえているが、アシカショーなんて全く記憶にないと言う。

河野裕子のうたは、前衛系の「幻想派」の中では異質で実にうまいと感心したものである。学生の当時の状況とは無縁の明かるさに充ちていて、それは自分にはほど遠かったが、近代短歌がよみがえってきたようなつかしきをおぼえた。

夏帽子すこしななめにかぶりゐてうつ向

くときに眉は長かり

河野裕子

われを呼ぶうら若きこゑよ喉ほとけ桃の

核ほどひかりてゐたる

この頃までには、さすがに私にも、短歌は「現代短歌」になっており、尖鋭的に現代的であらんとめざしていることがわかってきた。アララギ系の結社「塔」であっても、前衛系の「幻想派」であっても、論議の用語も、二元的な問題の立て方も、逃げ出してきた場所と地つづきで（当たり前なのだが）、どうも息苦しい。「意識が足りない」「積極的な表現を」などの物言いは拒否反応が起こる。現代詩とそう変わらないことも、では何で短歌なのかと不満だった。そんなとき、文庫本の茂吉の「赤光」を読んで、こんなに面白いうたがあるのかと思った。これも短歌なんだ、と驚かれるとは茂吉もびっくりだろう。

どんよりと空は曇りて居りたれば二たび
空を見ざりけるかも

斎藤茂吉

二月ぞら黄いろき船が飛びたればしじ
みとをんなに口触るかなや

わが目より涙ながれて居たりけり鶴のあ
たまは悲しきものを

長鳴くはかの犬族のなが鳴くは遠街にし
て火は燃えにけり

月落ちてさ夜ほの暗く未だかも彌勒は出
でず虫鳴けるかも

ヨルダンの河のほとりに虫なくと書は残
りて年ふりにけり

あちこちで噴き出しそうになったり、脳天がしびれるような気がした。何でこんなことをうたにするんだろう、というのがまじって
いるのも興味が湧いた。もつとも、この時点では、私は、茂吉のう
たのシニールなところ、唐突な不思議な結び付きが、特に気に入
ったのだ。詩のシニールさとは違うもの、一首の中で短歌のかた
ちとして表わされたものが、わけはわからないのに、どうしてこん
なインパクトを与えるのか。シニールなうたといつても、一行詩の
文体にすると、たちまち平板になってしまうのは何故か。そうい
うたを「京大短歌会」でたくさん見るだけに、レベルの違いはさし
置いて、くたくだと考えたのだった。

ついで、やはり文庫本で『佐藤佐太郎歌集』を読んで、こちらも
好きになった。「塔」にはじめて書いた文章が『帰潮』についてで
あったと思う。佐太郎の方は、茂吉の異質なインパクトにくらべて、
なじんでくる空気、同化するものという感じで、伝染性があった。

係恋に似たるころよ夕雲は見つあゆ
めば白くなりゆく

佐藤佐太郎

滅びにしかつての街とわれの行く丘は夜
空にもりあがり居る

今しばし麦うごかしてゐる風を追憶を吹
く風とおもひし

雑然としたるもくろみの湧きながら道に
しぶきし暮がたの雨

今も愛唱するこいううたは、私の初期の

がらんどうの午後の電車の明かるみに閉
ざされており外はしぶきて

悲しみに馴れつつおればあたたかく岸べ
の胡蝶花が近づいてきぬ

街中に出づる路地にてはるかなるとどろ
きのようなものを聴きいし

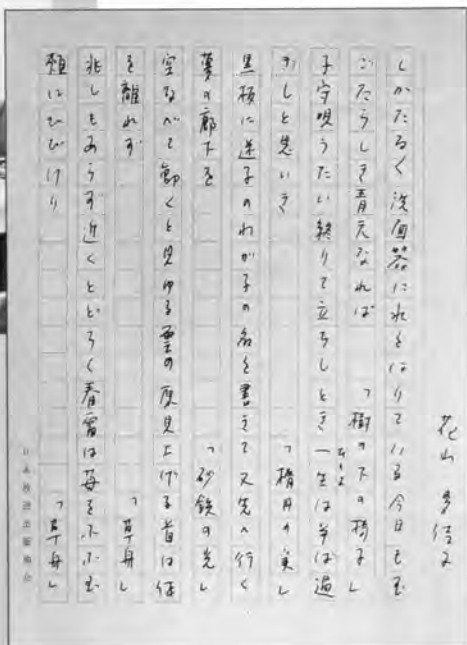
あたりに、かなり影響を与えているようだ。自分では当時は似て



平成2年、長野県の戸隠で行われた「塔」の全国大会にて。娘とともに。左端は現「塔」主宰の永田和宏氏。

花山多佳子
(はなやま・たかこ)

昭和23年、東京生まれ。
同志社大学在学中「塔」入会。歌集に「樹の下の椅子」「精円の実」「砂鉄の光」「草舟」。
平成6年「草舟」で第二回ながらみ賞受賞。現代歌人協会会員。



いるとか意識していなくて、このうたは様さまになったぞ、という感じだった。けれどあとで読むと、前二首は、いかにも女の子が、佐太郎タッチだけを摂取したようで、何か気はずかしい。佐太郎のうたはすぐ移ってくるので、今は多少警戒してあまり読まないようにしている。

大学を卒業して東京に戻ってからは、短歌をやっているとはいえない低迷状態が長くつづいた。「塔」も欠詠ばかりで、いいかげんにやめようと思ったことも再三であった。別に会社ではないのだから、短歌をやめるとかやめないとかいう発想自体がおかしいのだが、この頃になって、父と同じことをやっていくというのが、しんどく思われてきたのである。

京都にいるとき、自分がうたを始めたことを父が知るとは何故か思っていなかった。でも、せまい世界だから人づてに伝わって、伝わったことを知ったときはショックで一晩眠れなかった。すでに、父のうたも評論も読むようになっていたし、始めた時点とはちがって、単純に切り離しては考えられなくなっていた。父が生きているうちは、どうも自由な気持で、短歌をつくったり学んだりしていく自信がない。親子二代でうたをつくるケースはざらであるし、一般的に問題があるとはいえない。が、私の場合、共に暮らしていないかつた分、父親の存在自体が支配的絶対的な影になっており、それが同じ道にすすむことで、決定的にのしかかってくるのは耐えがたかった。

ふっ切れたのは、展望がひらけたからではなくて、もう若くなくなっていたからである。